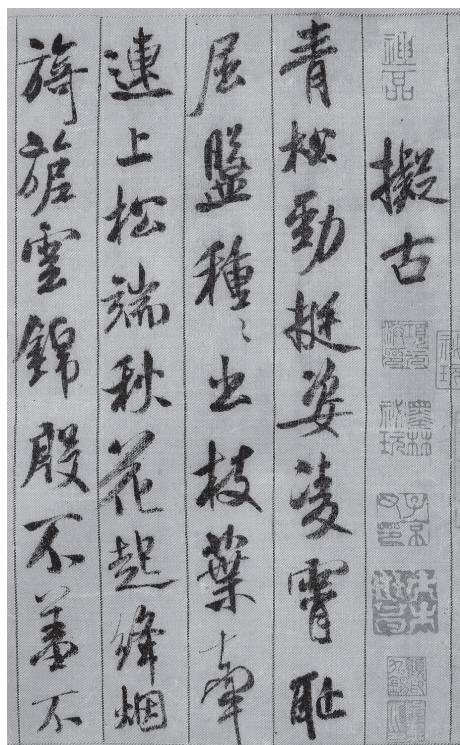


宋・米芾（蜀素帖）

「いましばらく待つてくれい。この手が乾くまで」

ようやく現れたこの家の主は、いいながら濡れた両手を日光にかざした。さらに、水滴が客の顔面に飛び散るのもかまわず振りまわした。

客は、露骨にいやな顔をした。



それだけでなく、いい年齢をした士人が、それも閻立本（唐代の画家）の絵から抜けだしたような古雅な衣服をまとった男が幼児のように両手をぶらぶらさせている図など、あまり見よいものではない。袖でたまりかねた客は、水滴を避けながら抗議した。

「拭^ふけばよろしいでしょうに」

「汚い」

かえつてきた言葉は、これだけである。

米芾（一〇五一―一一〇七）の変態ふりを、小さな物語に仕立てた井上祐美子氏の短編小説「潔癖」（『季刊歴史ピープル』一九九五年陽春号、のち講談社文庫『異色中国短編傑作大全』所収）の書き出し部分である。

第一級の芸術家には、尋常の尺度では測れない変人、奇人がいる。しかし、米芾ほど、常軌を逸したエピソードをもつ人物は稀であろう。

手を洗ってもタオルは使わず自然乾燥を待ったという、極端なまでの潔癖性の持ち主であつた。わざと唐代の風を模した服装を身につけて人の目を驚かせ、奇妙な形の石に出会えば、衣冠を正して拝礼するほどの熱狂的な奇石マニアであり、他人が所蔵する優れた書画を見れば、奇策を弄して自分の所有物にしないと気がすまない人物でもあつた。

一度手に入れた書画は後生大事に秘蔵するのではなく、機会あるごとに自由に気に入つたものと交換して楽しむべし、という合理主義者でもあつた。

「今人、一物を収むるに、生命と俱^{とも}にするは、大いに笑う可きなり。人生、目に適^{かな}うの事、看^み

こと久しければ即ち厭く。時に新玩に易ふれば、両ながらに其の欲に適う。乃ち是れ達者なり。」

〔画史〕

「米顛」、「米痴」とあだ名された米芾。多才多芸であつたが、とりわけ歴代の書法に対する鑑識眼は鋭かつた。古人のすぐれた名跡を見るのが好きでたまらず、それに見入っていると、近くで雷がなつても気がつかないほどだ、とも自分で言っている。

氣に入つた書法はとことん習い尽くし、早くも三十代の終わりには、完全に独自の特徴を備えた書風を確立している。

三十八歳の時、湖州知事の林希なる人物に請われて、自詠の詩八首を、蜀で織られた美しいわざび色の絹に連書した〈蜀素帖〉（台北・国立故宫博物院蔵）は、そのことをはっきりと伝える傑作。ここに掲げたのはその冒頭部分。

「古に擬す。青松勁挺の姿、霄を凌ぎて屈盤を耻づ。種々として枝葉を出し、牽連して松端に上る。秋花絳烟を起し、旖旎として雲錦殷なり。（自立）せざるを差じず、」

文字の構えは前のめり。運筆は筆圧の強弱をはっきりと加えて開閉運動を繰り返す。つかかると、引つかけるように、ブラシでさつと掃くように、筆が操られる。彼が学んだ王羲之の書にはほとんど見られない筆の働かせかたである。氣負いに満ちた厳ついタッチは、いつも落ちつかないこの人の性格の反映かもしれない。

米芾は字を元章げんしょうといい、襄陽居士じょうし、海岳外史かいがくがいしなどと号した。出身は湖北襄陽、本籍は山西太原さんせいだい。宋代初期の功臣・米信は彼の祖先にあたる。遠い祖先はイラン系のソグド人であったという説もある。科挙によらず、特例により十八歳で任官。のち地方官を歴任したが、官吏としての功績は乏しい。徽宗皇帝きそうの時、史上はじめての書画学博士に任ぜられた。黄山谷こうさんてく（一〇四五―一一〇五）には米芾に贈った次のような詩がある。建中靖国元年（一一〇二）の秋のころの作、「戯れに米元章に贈る二首」がそれである。参考までに倉田淳之助著『黄山谷』〈集英社「漢詩大系」第十八巻〉から、この二首の訓読と現代語訳を、引用させていただく。

萬（万）里の風帆 水 天に著く

麝尾 鼠尾 年年を過す

滄江の靜（静）夜 虹 月を貫く

定めて是れ米家 書畫（画）の缸

（貴方は江淮こうわいの間にあって、風をはらむ帆で水と天と合う所を旅されて、墨と筆で年年を過すごされる。江上の静かな夜、虹が月を貫くように宝気があるのは、さだめし貴方が貴重な書画を船に積んで居られる為である。）

我^{われ}に元暉^{げんき}の古印^{こいん}章^{しょう}有^あり

印^{いん} 剋^{つぶ}れども諸郎^{しやうろう}に與^{あた}(与) ふるに忍^{しの}びず

虎兒^{こじ}(兎) の筆力^{ひつりよく} 能^よく鼎^{かなへ}を扛^あぐ

元暉^{げんき}と字^{あざな}して阿章^{あしやう}を繼^つ(繼) がしめよ

(私に謝元暉の古い印章がある。印は古くてつぶれているが名人のものだけに後輩達に与えずに持っている。息子さんの虎児は筆力が大変すぐれていられる。この印を差上げるから冠をつけられる時には元暉と字をつけて文章のすぐれた貴方のあとをつがして下さい。)

米芾には五男八女があつた。黄庭堅がこの詩の中で将来を期待した「元暉」、すなわち米友仁はその長男で、米芾三十六歳の時の子である。(161ページの米友仁の項参照) 次男の米尹^{べいいん}知^ちとともに早くから書法を得意とした。この尹知の方は、父親の代筆者として石碑の書を任されることもあつたらしい。そのことは米芾の死後に編纂された発言記録集『海岳名言^{かいがくめいげん}』の中にも見られる。とくに大きめの字では、自分でも区別できないほどの出来栄えだったと米芾は述べている。長男の米友仁は長寿を得た。しかし、次男の米尹知をはじめとする男子四人はいずれも早く世を去っている。